

「弔う」とは…自問

葬儀会社社員 西村 恒吉さん(41)

「弔う」とはどのようなことか。特に、いちどきに多くの、悲惨な死が生まれるとき――。

西村恒吉さん(41)は25歳でトラック運転手から葬祭業に転じ、現在の「清月記」(本社・仙台市)に入社した。何百もの遺体を見送って10年余が過ぎ、大震災は起きた。

その夜から大量の棺の確保に走った。死者数は膨らみ、火葬場の能力が追いつ

11日に 想うつ

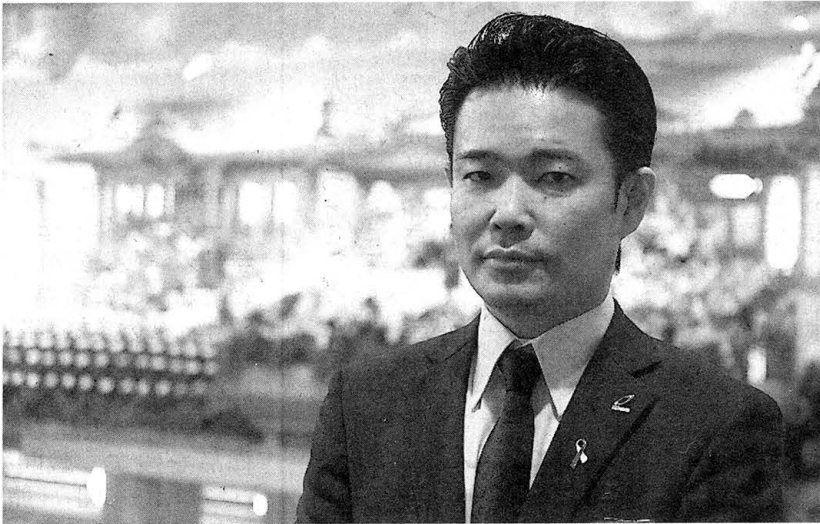
震災4年2ヵ月

それは、想像を超える凄

かない。棺に入れるドライアイスも足りなかった。行政は混乱の中、腐敗が始まった遺体を土中に仮埋葬することを決める。2年後をめどに掘り起こし、改めて火葬する前提だった。ところが、ひと月ほどして火葬場に少しの余裕が出てきた。遺族は一刻も早く土の中から出し、火葬したいと求めた。石巻市からの委託で、清月記は700近い仮埋葬遺体の「掘り起こし」を請け負った。

西村さんは社員9人の専従チームのリーダー。8月までの3ヵ月間を業務日報に詳細に記している。

遺体の尊厳保つ誇り



凄さだった。重機で掘り出した棺の多くは、土の重みでつぶれかけていた。ロープをかけてつり出し、納体袋を開ける。途端に、血液と体液、たまった雨水がザザーッとあふれ出し、強烈な臭気が

立ちこめた。ハエが群がる中、新しい棺に移し替え、火葬場に運ぶ。

頬の泥をふきとり、口中に綿を詰め、閉じる。髪ごと頭皮がはがれかけていれば、包帯で隠した。

娘の顔をどうしても見た

という父親がいた。棺にランドセルと一緒に納められている。迷った末、西村さんは「ご覧いただきありがとうございます」とつぶやいた。「慣れ過ぎて、単なる死体処理に見えたのだろうか」と、西村さんはまた自問した。

県内で土葬された計2108体は、震災の年11月までにすべて掘り起こされ、火葬に付された。各地で葬儀業者が汗を流した。

「私たちが遺体の尊厳を大切にしたのは、そのま

景や臭いを思い出したとき、ささやかな花の記憶が救いになるのでは――と、考えた。

降る日も照る日も重労働は続いた。1日に8体、10体、13体。手順を覚え、役割分担ができ、どんな遺体にも驚かなくなった。2ヵ月が過ぎたころ、応援に入った社員が「完全な作業ですわ」とつぶやいた。「慣れ過ぎて、単なる死体処理に見えたのだろうか」と、西村さんはまた自問した。

きついことやらされるんだと、思ってしまうがちだ。でもうちの社長は、ひとさまの最期にかかわる高貴な仕事だと言いつづけた。たとえ『作業』に見えようと、能力を総動員し、プロならではの仕事を精いっぱいする。それが、この職業の誇りだと思っんです」

震災の2年半後、清月記は西村さんの発案で、納棺事業部を発足させた。専門の納棺会社に外注していた遺体の着せ替えやメイクを、自前で進めるようにした。最後の対面を少しでもよい状態で迎えていただき、遺族の悲嘆をやわらげる。葛藤を続けた問いへの一つの答えだった。

若手社員6人が研修を経て納棺師になり、旅立つ人の身支度を手伝っている。

(石橋英昭)

西村恒吉さん。現在は「清月記」業務部部长。仙台市青葉区

「ともすれば、どうせ俺たち葬儀社だから、こんな